

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

文字のよみかき・よみかき能力をあらわす識字（リテラシー）が社会的な問題としてとらえられるようになったのは、近代国家が成立し、政府が公教育・社会教育にのりだしてからのことである。初等教育の義務化がある程度ですすめられると、大多数のひとびとは学校で文字のよみかきがある程度習得し、「識字者」となる。日本では、一八七二年の学制発布を^①端緒として、「徹底して識字の価値観を行きわたらせる^a施政」がおこなわれ、「文字が読めなければ社会生活に^②シシヨウがあるような、文字を読むことを社会生活の基本的な条件とする社会」がつくられることになった。それに対し、教育から排除されてしまったものや、学校教育をうけたにもかかわらず、よみかきの習得ができなかったものは「非識字者」となる。

近代化・産業社会化の過程で、識字には「のぞましいもの」「達成すべきもの」という正の価値が、非識字には「克服・消滅させるべきもの」という負の価値があたえられ、この価値判断をうみだすイデオロギーにそって、社会はつくりかえられていく。「文字を読めることが人間的な価値と見なされ」、同時に「生活世界の序列とは異質な価値基準として、読み書き能力が人間を測定する座標軸になった」のである。それによって、一方では立身出世による社会的な階層^③ジヨウシヨウが可能になるなど、社会の近代化が実現する。しかし、近代化が一定程度の段階ですすむと、他方で非識字者は絶対的な少数派となり、その結果、社会はすべての人間が識字者であることを前提に運営されていくようになる。非識字（者）の存在は、みえないもの、例外としてわすれられ、さらには日本社会においてそうであるように、「あるはずのないもの」というおもしろいこみが社会を支配するようにすらなる。

よみかき能力があることを自明なことにする社会においては、非識字者は非常な不利益をたえしので生活をおくることをしい^bられる。文字がよめなければ、自分で公共交通を利用することも、病院内でいくべき場所へたどりつくことも、買いものをすることもかなりむずかしい。さらに重要なのは、「負の価値」をまとった人間であると、社会全体から日々レットル^cはられ、それを確認させられつづけなければならぬ。境遇^cでは、自己^④コウテイ感・自尊心が十分に維持できなくなっていくことである。これらの不利益がいかに苛烈であるかについては、当事者たる非識字者による無数の証言があり、そのなかには生命を直接左右するようなものまでふくまれている。つまり、非識字者の生存権・社会権は、よみかき能力が自明視される社会では、さまざまなかたちで侵害されている。この人権への侵害、社会からの排除は「非識字者差別」とよぶことができる。

非識字者差別を説明的に定義するなら、「識字に社会的価値をあたえ、よみかき能力を自明視することによって非識字者を社会的劣位におき、その結果、少数者である非識字者に社会資

源配分上の不利益をしいること、その構造」とできよう。非識字者差別は、現代日本社会、「先進」工業国とは無関係な、過去のこととおもうひともしれない。しかし、社会の構成員による文字の運用を前提に設計される現代社会では、いままも非識字者差別の再生産がつづいている。^A 初中等教育の徹底化、高等教育の一般化にともなって強化されてきてすらいのが現状である。

非識字者差別は、文字をもちいて情報の発信・受信を日常的におこなう識字者が多数派をしめ、そうでない非識字者を情報の発信・受信から排除することによってなりたつ（たとえば、バスのいき先を文字だけでしめすことによって、文字をよめないひとがバスを円滑に利用することを不可能にする）。この非識字者差別の構図は、優勢言語の使用者が劣勢・少数言語の使用者をコミュニケーションから疎外^dすることによっておこる言語差別とおなじである（たとえば、英語の使用者は「国際」的コミュニケーションで優位にたち、たかい社会的威信をもつことができる）。コミュニケーションの優勢な道具の使用者（識字者）は、コミュニケーションにおいて優位にたち、その道具をつかえないひと（非識字者）は劣位におかれて不便をしいられる。つまり、非識字者差別はひろい意味での言語差別のひとつのバリエーションといえる。また、非識字者差別が合理化・正当化されつつ再生産・強化される過程も、ほかの言語差別の場合とまったくおなじである。非識字者は、「文字を習得しない・できない」ことに負い目を感じ、「文字を習得するように、識字者になれるように」、「はげまされ」つづける。はれて「識字者になれる」までは、社会生活上の不利益にたえることをしいられる。優勢言語がつかえないひとは、優勢言語の習得をもとめられる。それができないときの不利益は「自分の責任」として甘受させられる。

B こうした非識字者差別の構造をかんがえるなら、非識字者に対する差別のしくみ、内実の⑤ ケントウは、非識字者差別の解決の糸口をえること以上の意味があることがわかる。それは、識字だけではなく、言語、コミュニケーションにかかわる差別の一般的性格をかんがえるてがかりとなるのである。

（かどやひでのり・あべやすし編著『識字の社会言語学』所収かどやひでのり「日本の識字運動再考」より。）

問一 傍線部①～⑤のカタカナは漢字に直し、漢字は読み方をひらがなで書きなさい。

問二 傍線部 a「施政」と同じ構成の熟語を、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 習得 イ 発布 ウ 近代 エ 非常 オ 立身

問三 傍線部 b「られる」と同じ意味用法の「られる」を、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア もう一皿くらいなら食べられる。
 イ 先生が教室から出てこられる。
 ウ チームメイトから声援をかけられる。
 エ 被災地の友人のことが案じられる。
 オ この人の言うことならば信じられる。

問四 傍線部 c「境遇」の「境」が同じ意味で用いられている熟語を、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 越境 イ 国境 ウ 境内 エ 境涯 オ 境界

問五 傍線部 d「疎外」の対義語として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 投入 イ 近似 ウ 受容 エ 平等 オ 圏内

問六 傍線部 A「中等教育の徹底化、高等教育の一般化」にもなって強化されてきて「ある」とあるが、なぜ教育の「徹底化」「一般化」にもなって非識字者差別が「強化される」のか。その理由として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 識字者と非識字者の言語能力に一層の差がつくから。
 イ 非識字者を差別する意識がいきわたるから。
 ウ 非識字者が再生産されるから。
 エ 優勢言語の使用者が増えるから。
 オ 識字者であることが当たり前の社会になるから。

問七 傍線部B「こうした非識字者差別の構造」とあるが、その構造の特徴として適切でないものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 識字者が非識字者を情報のやりとりから排除する。
- イ 識字者がたかい社会的威信をもつことができる。
- ウ 非識字者が文字を使えないことに負い目を感じるようになる。
- エ 非識字者が識字者になれるように努力をしいられる。
- オ 非識字者が当然のものとして生活上の不利益をこうむる。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

これからの人類の知的探究の方向性を特徴づける重要な概念として「多様性」があることは疑いない。多様性は、何十億年もかけて地球上で^①育まれてきた自然の生態系自体が持っている性質でもある。「万物の霊長」として自らを自然から切り離れた人類の歴史は、しかし、皮肉なことに、突き放したはずの自然の奥深さに「追いつく」果てしなき過程でもあった。

A 自らを乖離^{かいり}しなければ、追いつく必要もなかった。自然の中に^②マイボツしているのであれば、その因果的法則を理解するという努力を積み重ねるまでもなかった。ただ包まれて、生き、死んでいくだけでよかったのである。人間は、この宇宙の成り立ちを理解する「知性」を持ってしまったがために、未来を自ら律するという、意識なき実在たちからは^③フユウした「特権」と「悩み」を抱えるに至った。

「多様性」は、これからの時代を特徴付けるもう一つの大概念である「持続可能性」と深く結びついている。システムが持続可能でなければ、その中に多様性が育まれることもない。短い時間で更新され、リセットされてしまうようなシステムの中では、多様性は育まれ得ない。多様性は、「持続可能性」の直接の果実である。「持続可能性」は、単なる現状の維持ではなく、
I、多様な未来への積極的な企図なのである。

脳の中に蓄積される経験の多様性も、人生が「持続可能」であればこそである。「天才は夭折^{せうせつ}する」という伝説は喧伝^{けんでん}されすぎた感がある。ある程度の年月の間積み重なり、熟成している経験の連なりがなければ、すぐれた文化的事象は起こりようがない。II 常人に比べれば短かったとしても、ほとんど「白紙」の状態で生まれ落ちて始まる密度の濃い「助走」の期間があつてこそ、モーツァルトはモーツァルトたり得たのだ。

世の中が多様で複雑であるということは、容易には普遍的な原理を打ち立てられないことを意味するようにも思われる。実際、多種多様な生物の棲^すまうジャングルの生態系を前にすると、それらを一つの普遍的な原理で把握することは至難の業であるようにも感じられる。だからこそ、「世の中は多様だ」という発言が、しばしば一般原理による単純な割り切りを^④戒める処世訓としても作用する。

地球環境の保護にかかわる意識が高まる中で、還元主義的世界観に対するアンチテーゼとして「多様性」が登場してきたという歴史的経緯は、無視するべきではない。世の中を単純に割り切り、コントロール可能な対象へと変えようとする人類の衝動は、豊かな生物多様性を内包する原生林を切り倒し、人間にとって価値の高い作物の単一耕作（モノカルチャー）を行うという形で地球上の生物多様性を破壊してきた。その衝動は、自らが管理可能なように都市空間をコンクリートや鉄やガラスで固めるといって徹底した^⑤ケツペキ主義を導いてきた。人類は今、

そのような愚行のしっぺ返しを受けつつある。

ここで、注意しなければならぬことがある。Ⅲ、容易には見通せない事態が進行していることは、多様性の涵養かんように資するように思われる。複数の相容れない要素が絡み合い、さまざまな変化を遂げていくプロセスは多様性を育む大切な契機aとなる。しかし、だからといって、多様性の存在自体が、「普遍性」を否定するのではない。「多様性」は、「普遍性」の対立概念ではない。むしろ、Xこそが、人類にとつての最大の知的探究の課題なのである。「進化論」を唱えたチャールズ・ダーウィンの偉大さは、この地球上の眩惑げんわくされるほどに多様な生物の種という一見手に負えない多様性を、進化を特徴づけ、推進する普遍的な原理の下に説明することに成功した点にあった。目に見えないバクテリア、多種多様な昆虫、地面を這はいずり回るミミズ、空を飛ぶ鳥、海を泳ぐ魚。人間の日常的想像力をはるかに超えるさまざまな姿を見せる地球上の生きものたちは、IV、気まぐれな創造主によって一つひとつ手作りされたものではない。ダーウィンが明らかにしたように、「突然変異」と「自然淘汰とうた」という原理の組み合わせによって、単純で原始的な生命のフォームから長い年月をかけて進化してきたのである。そこに働いていたのは、どのような生物種にも、生態学的地位（ニッチ）にも通底する一つの普遍的原理であった。ダーウィンは、「普遍性」と「多様性」を、史上初めて論理的に整合性のある形で結びつけたのである。

生物の多様性の背後にDNAという普遍的遺伝原理が作用していることが明らかになったのは、ダーウィンが『種の起原』を出版してから約一〇〇年後のことである。

B 多様性は、ともすれば人を酔わせ、知性を麻痺まひさせる。現代社会における価値観の分裂を言うことはたやすい。しかし、だからといって、人間の社会の多様性を、「人それぞれさ」とひとりで片付けてしまうのは知的な怠惰である。科学者は、より一般に学者というものは、たとえ目の前に一見手に負えないような多様性がある場合にも、決して諦めずに、その中を貫く普遍性を追い求めなければならない。そうでなければ、学問をする甲斐はない。

この宇宙の中の多様性を全て包み込む普遍性などないと諦めてしまったら、人類の歴史が誇るべき多くの知的な成果は存在しなかっただろう。自然の強靱きょうじんな「持続可能性」が育んできた多様性に対抗するためには、人間の側にも「持続可能」な粘り強い知性が必要となる。そして、叡智えいちが私たちが生きることaに資するためには、一筋縄ではいかなない多様性の中に飛び込み、それでもなお、普遍性への志向を失ってはならないのである。

注意深い読者は、ここに、一神教的世界観と日本の「八百万やおよろずの神」のような多神教的世界観を融合させる論理的可能性を見ることだろう。

「多様性」と「普遍性」は必ずしも相容れない概念ではない。とはいうものの、過去において、「普遍性」をb標榜ひょうぼうすることが時に多様性を破壊し、モノカルチャー的な世界の実現に力を貸

す結果を招いてきたことも事実である。

「普遍性」という概念の用法を誤ると、多様性を育む自然の中の傾向とは異なる方向に世界を導いてしまう。「人間にとつての効用」という単一の原理で割り切つて形成された地上の様子がどのようなものになるかは、大都會の中で自分の周囲を眺めればわかることである。ガラスや金属といった表面的な輝きを削いでみれば、そこにあるのは灰色に塗り込められた単調さである。熱帯雨林の中のさまざまな生きものの奏でる鳴き声は、そこには響かない。

多様性を刈り込み、この世界を単一の価値観で塗り込めるかに見える「普遍性」概念の作用がある。たとえば、有用な商品作物を世界中で大量に生産し、単調な生態系を形成してきた人類の営為がある。異なる文化、思想を持つ人々に対する不寛容の歴史も、「普遍性」概念の暴走である。昨今の「グローバリズム」の嵐の中で、単一の価値観、社会システムが地球上のさまざまな地域を覆うかに見える動きもまた、世界の多様性を減少させる「普遍性」の過剰作用の結果である。世界中に数千の異なる言語があるという現状の中で、そのような言語多様性がないがしろにするかに見える英語への一極化も同様に、「普遍性」概念の行きすぎた適用である。

自然界における生物のありさまを見ればわかるように、ある場所に適した表現形質は、他の場所でも適しているとは限らない。約四億年前のデヴォン紀にすでに化石が見いだされるシラカンスは、池や山などの淡水域では繁栄できない。生きものたちは、それぞれに適した生態学的地位の中で、他の生きものたちと肩を寄せ合つて生きている。

「ある場所で成立する。命題は、他の場所でも成立する」あるいは「成立すべきだ」と見なされる時、^c「普遍性」の概念は劇薬的副作用をもたらす。ある社会では有効に機能する制度が、他の社会でも効果を上げるとは限らない。「普遍性」を標榜するということは、ある単一の世界観、価値観を異なる文化背景を持つ人たちに押しつけることを意味するのではない。「普遍性」概念の誤用は、国際政治においては常に軋轢あつれきを生んできた。ある国で成功した「改革」が、別の国でも成功裡りに適用できるとは限らない。全ての場所である原理が成り立つと考えることは、多様性の破壊へと結びつく。

歴史的背景も、文化的な伝統も異なり、^v容易には理解できない他者を自らの価値観で判断してしまうことは、典型的な「普遍性」概念の誤用である。「普遍性」を標榜した他者の異質性に対する不寛容が、時には大量虐殺や民族抹殺といった悲劇に結びつくということ、人類は二十世紀において嫌というほど経験してきた。

地球上のさまざまな生物の種の多様性を生み出す原動力となってきた「突然変異」や「自然淘汰」といった普遍的概念と、世界をモノカルチャー化しかねない「普遍性」の押しつけは、明らかにその成り立ちが違う。両者を混同したままでは、私たちは生きるための道筋を失つて

しまうことだろう。

(茂木健一郎『疾走する精神』より。)

問一 傍線部①～⑤のカタカナは漢字に直し、漢字は読み方をひらがなで書きなさい。

問二 空欄 I ～ V に入れるのに最も適切な言葉を、次のア～オのうちからそれぞれ

一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか選べないものとする。

ア 決して イ むしろ ウ すなわち エ 確かに オ たとえ

問三 傍線部 a～c の言葉の意味として最も適切なものを、後のア～オのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 契機

ア めぐり合わせ イ きっかけ ウ 取り決め エ 見とおし オ 条件

b 標榜する

ア はつきりと表す イ こだわり続ける ウ 反発して捨て去る

エ 考慮に入れる オ 頼りきる

c 命題

ア 真偽を問う問いかけ イ 関心を集める表現 ウ 達成されるべき目標

エ 与えられた言いつけ オ 何らかの判断を表した文

問四 傍線部 A「自らを乖離しなければ、追いつく必要もなかった」とあるが、どうか。その説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人類が知的探究の目標として多様性を掲げるようになったのは、自然の生態系が持つ多様なあり方から学ぶようになった結果だということ。

イ 人類が豊かな自然環境を破壊してまで技術を発展させてきたのは、自然の持つ多様性という特徴を理解することができていなかったからだということ。

ウ 人類が自然の持つ性質を探求しなくなったのは、知性を持って他の生物から自分たちを特権化するようになったからだということ。

エ 人類が生態系のあり方から逸脱して「万物の霊長」の地位を得てしまったからこそ、「万物の霊長」として未来の自然環境を守る責任も生じたということ。

オ 人類が自然の因果的法則を理解する努力を積み重ねてきたのは、自然の多様性がそれだけ複雑で奥深いものだからだということ。

問五 空欄 X X に入れるのに最も適切な内容を、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 容易には見通せないような「多様性」を貫き、それを生み出す普遍的な原理を見いだすこと

イ 「普遍性」の徹底によって、「多様性」を生むさまざまな変化が生じないようにしていくこと

ウ 「多様性」と「普遍性」の矛盾を解消する、自然の原理となる新たな性質を見つけていくこと

エ 自然の全てのものに共通してあてはまる「普遍性」を目指し、「多様性」に惑わされないようにすること

オ 自然にとって「多様性」がより根源的であることを認識し、限定された領域の「普遍性」を見つけていくこと

問六 傍線部B「多様性は、ともすれば人を酔わせ、知性を麻痺させる」とあるが、どういふことか。その説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 価値観が多様に分裂すると、それぞれ異なる個々人が社会全体を見通す考えを進めようとしてしまい、収集がつかなくなってしまうことがよくあるということ。
- イ 自然や社会が豊かな多様性を持つことは人類の知的探究の目標でもあるため、人は多様な現実を目の前にして目標が達成されたとよく勘違いしてしまうということ。
- ウ 社会や自然が多様性を持っていることは、人々を楽しませるが、なぜそれが人々にとって望ましいのかを探究せずとも、大抵の人は満足してしまうということ。
- エ 社会のあり方や価値観がさまざまに分かれていても、人はそれが多様であるということを確認するだけで満足し、思考を終えてしまいがちになるということ。
- オ 価値観の分裂や「人それぞれ」と思ってしまうような社会の多様性が見いだされること、人はその分析を諦めてしまうほど圧倒されてしまうことが多いということ。

問七 傍線部C「『普遍性』の概念は劇薬的副作用をもたらす」とあるが、本文中の「普遍性」のもたらす「劇薬的副作用」の例として適切でないものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間にとって価値の高い作物の単一耕作が行われること。
- イ 都市空間が、管理しやすいようにコンクリートや鉄、ガラスで固まること。
- ウ 異なる文化、思想を持つ人々に対して不寛容になること。
- エ 言語多様性をないがしろにするかのように英語へ一極化していくこと。
- オ 自然界で、ある場所に適した表現形質が他の場所には適さないこと。

問八 本文の内容に最もよく合致するものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自然の「多様性」と人類の知性の「持続可能性」とは深く結びついており、人類の「持続可能」な知性のもとしてしか「多様」な自然環境は育たない。
- イ 世界が複雑で多様であるかぎり普遍的な原理を打ち立てることは不可能であることが歴史的にわかってきたため、「多様性」概念が重視されるようになってきた。
- ウ ダーウインの「進化論」が優れているのは、「突然変異」「自然淘汰」という数少ない普遍的な原理によって地球上のさまざまな生物の多様性を説明した点にある。
- エ 自然の中でさまざまな脅威にさらされながら人間が生きていくためには、人間は粘り強い知性の「持続可能性」をもち続けていく必要がある。
- オ 大量虐殺や民族抹殺といった悲劇を繰り返さないためにも、他者の異質性を否定し、異なる文化、思想を持つ人々とも価値観を共有していけるよう努めるべきである。

国
語

解答用紙

—

問一

④	①
⑤	②
	③

問二

問三

問四

問五

問六

問七

二

問一

④	①
める	まれ
⑤	②
	③

問二

IV	I
V	II
	III

問三

a
b
c

問四

問五

問六

問七

問八

受験 番号	
----------	--